

令和4（2022）年度  
日本特別活動学会 第9回実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 9 - 1

対人的適応感の育成を目指すソーシャルスキルトレーニング  
～汎化を促すプログラムからのアプローチを通して～

実践テーマ	対人的適応感の育成を目指すソーシャルスキルトレーニング ～汎化を促すプログラムからのアプローチを通して～
実践区分 ○で囲む	<p>学級活動、ホームルーム活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動 学校行事、その他（具体的に、）</p>
実践事例の 背景、 ねらい、 意義など	<p>本研究は、児童の対人的適応感の育成を目的として、段階を踏んだ継続的な SST プログラムを実施した。週に1回、継続して SST を実施した結果、学級満足度尺度を構成する承認得点と被侵害得点において、有意な上昇が見られた。また、児童の自由記述を分析した結果、SST を継続し、対人技能を意図的に活用し、社会的なスキルを体得していくことによって、学級での対人的適応感の向上に寄与したことが示唆された。さらに、体得した社会的スキルや価値のよさを肯定的に認知した児童は、次なる活動へ汎化させていこうと前向きな展望を抱く姿につながっていった。</p>
実践の時期	令和2年5月～6月

## 1 問題の所在と目的

「うぜえ」「ハア？バカじゃん！」「お前、一度死んで来い」。これは、年度当初、6年生の教室で飛び交っていた言葉である。文字起こししてみると、溜息をつきたくなるが、子どもたちは実に明るい表情でこうした言葉を交わし合っている。ならば、よしとして良いのだろうか。いや、だからこそ問題なのである。このような言葉が定常的に飛び交っていると、周囲は問題として認知しなくなっていく。その日は、沈んだ様子もなかったのに、次の日になると、その出来事を思い出し、学校に行く勇気がくじかれてしまったなんてことが起こる。言葉のダメージは、言われた者の心を静かに蝕んでいく。今の子どもたちは、自分の発する言葉に鈍感で、自分に向けられる言葉には敏感であるということを実感した。

実際に「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省，2021）では、小学校のいじめ認知件数は、3年連続40万件を超え、依然高い水準を保っており、態様別状況に目を向けてみると「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が最も多くの割合を占めていることを明らかにしており、学校における対人的な不適応が学校現場において大きな問題となっていると考えられる<sup>(1)</sup>。そして、上述した事例や児童の不適切な行動は、どこの教室でも起こりうることであり、調査を引き合いに出すまでもなく「今、子どもの言葉や関わり方が危ない」というのは、教育関係者の共通の認識ではないだろうか。

このような子どもたちの対人的不適応について、清水(2012)は、ソーシャルスキルに関する動向研究から、学校生活スキルと不適応行動との関連を報告しており<sup>(2)</sup>、河村(2007)は、ソーシャルスキルを「対人関係を営む知識と技術」とし、体験学習を通してスキルを身に付けるトレーニングをソーシャルスキルトレーニング(以下、SSTとする)の必要性を主張している<sup>(3)</sup>。実際に、社会的スキル獲得に向けてソーシャルスキル教育(以下、SSEとする)に取り組んだ佐藤ら(2000)は、学級集団を対象とした集団SSTの実施が成果を挙げていると報告している<sup>(4)</sup>。また、藤枝ら(2001)は、集団SSTの効果として、学級内の全児童が社会的スキルの学習機会を得ること、児童同士がモデルとなったりフィードバックを与えたりすること、社会的スキル獲得の促進が期待できることや学級集団への実施は、対人関係における不適応の予防として適していることを報告している<sup>(5)</sup>。このように、SSTに関する先行研究を概観してみると、本学級においてSSTを実施することは、児童の実態とも適合するのではないかと考えた。

そこで、本研究は、段階を踏んだ継続的なSSTプログラムの実施が、社会的スキルの獲得・遂行を促し、学級での対人的適応感を高めることへ効果があるのかを検証する。その際、学級での対人的適応の指標として、河村(2006)による学級満足度尺度を使用する<sup>(6)</sup>。本尺度は、学級での友達や教師から承認されているか否かを示す「承認得点」と、不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けているかを示す「被侵害得点」の2つの下位項目から測定されるものである。この尺度の結果を、SSTプログラムの実施による児童の学級での対人的適応の指標とし、その因果関係をデータとして裏付けるために「SSTを通して、思ったことを自由に書きましよう」という問いに自由記述で回答する質問紙調査を行い、より詳細な検証を行った。

## 2 研究の方法

2020年5月11日から、2020年6月12日の間、計4回にわたりSST（学級活動）の実践を行った。学級で実践する際には、コーチング法や、藤枝・相川（前掲）による<sup>(7)</sup>SSEの手順に準拠して行った（表1）。

SST導入期（セッション1・2）は、小集団（ペア）での活動をメインにした。そして、児童が活動に慣れてきた段階で（セッション3・4）、集団（グループ）での活動をメインにしていくことによって、児童が学んだ対人技能を少数者集団から多数者集団へと活かせるようにしていった（表2）。なお、授業の記録に際しては、教室の前方と後方にビデオカメラを1台ずつ（計2台）対角線上に設置し、児童と教師の様子を録画し、分析材料とした。

表1 SST実施の手順

順	SSTの流れ
1	インストラクション ねらいとする対人技能を確認
2	モデリング 教師が手本を示す
3	リハーサル ペアで練習を繰り返し行う
4	フィードバック 評価・修正を行う
5	ホームワーク 汎化・維持する

（藤枝・相川をもとに筆者改変）

表2 標的スキルと実施プログラム

実施回数	標的スキル・「実施プログラム」
セッション1 〈ペア活動〉	友達の話を聞いて表情・声・身振りで表す 「目指せ！リアクションの達人」
セッション2 〈ペア活動〉	友達の発表に肯定的な意思を示す 「ペアDEトーク」
セッション3 〈グループ活動〉	グループのメンバー全員が話せるようにする 「すごろくトーキング」
セッション4 〈グループ活動〉	グループ全員で協力して解決策を考える 「無人島SOS」

## 3 成果と課題

### （1）学級満足度尺度の結果から

6年1組の学級満足度尺度の結果を表3に示す。学級全体として「承認得点」に焦点を当てると、有意な上昇が見られた（ $F=13.20$ ,  $**p<.01$ ）。また、「被侵害得点」については、逆転項目の得点修正を行った上で分析を行った結果、有意傾向が見られるという判定であった（ $F=3.44$ ,  $^+p<.10$ ）。なお、分析に際しては、中野・田中（2012）による「js-STAR」を用いて、一要因参加者内分散分析を行った<sup>(8)</sup>。

以上のことから、SSTプログラムの継続的な実施が、児童の対人的適応感に何らかの影響を与えていることが示唆された。

表3 学級満足度尺度の結果

6年1組 N=34	時期	Mean	S. D.	F比
承認得点	5月	3.35	0.46	13.20**
	6月	3.55	0.37	
被侵害得点	5月	2.81	0.69	3.44 <sup>+</sup>
	6月	3.00	0.67	

<sup>+</sup> $p<.10$     <sup>\*</sup> $p<.05$     <sup>\*\*</sup> $p<.01$

## (2) 学級満足度尺度の結果から

プログラム実施後には、佐藤(2008)を参考に、児童の自由記述を逐語データ化し、意味ごとのセグメントに切り分けた<sup>(9)</sup>。結果としては、1人あたり、平均10.6個の記述があり、まとめると54のセグメントが抽出された。中でも「全員が同じ時間に聞こえる声で話せていい」「自分のいいところなどをさがしてくれたからうれしかった」などの、承認感や対等性を意識した記述が42%と、最も多く見られた。また、次いで「次は私がだれかのいいところを生活の中で見つけたいです」「SSTで身に付けた力で授業中も協力したい」など、取り組みや体得した対人技能を教科場面や生活場面に汎化させていこうという記述が36%と、多く生成された。

以上、段階を踏んだ継続的なSSTプログラムの実施によって、学級での対人的適応感の育成に寄与した可能性が示唆された。また、体得した社会的スキルを肯定的に認知した児童は、次なる活動へ汎化させていこうと前向きな展望を抱く姿につながっていった。

## 4 今後の課題

課題としては、実際に子どもたちの行動にどのような変容があったかについては明らかにされていない点である。プログラムの実施後には、社会的スキルを活かして学級をよりよくしていこうとする向社会的行動が見られたことから、今後は子どもたちの実際の行動変容を捉えるとともに、サンプル数を増やして検証をしていくことが求められる。

## 引用文献

- (1) 文部科学省：「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」, 2021.
- (2) 清水由紀：「児童・生徒の発達研究の動向」, 日本教育心理学会, 『教育心理学年報』, 第51集, pp.11-21, 2012.
- (3) 河村茂雄・品田笑子・藤原一夫：『いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキル』, 図書文化, 2007.
- (4) 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・高山巖：「子どもの社会的スキル訓練—現況と課題—」, 宮崎大学教育文化学部, 『宮崎大学教育文化学部紀要』, 第3号, pp.81-105, 2000.
- (5) 藤枝静暁, 相川充：「学級単位による社会的スキル訓練効果に関する実験的検討」, 日本教育心理学会, 『教育心理学研究』, 49, pp.371-381, 2001.
- (6) 河村茂雄：『学級づくりのためのQ-U入門』, 図書文化, 2006.
- (7) 前掲(5)
- (8) 中野博幸・田中敏：『フリーソフト js-STARでかんたん統計データ分析』, 技術評論社, 2012.
- (9) 佐藤郁哉：『質的データ分析—原理・方法・実践—』, 新曜社, 2008.